

病気と文化財と私の人生

愛沢 伸雄

2019年、観測史上最大規模といわれた台風15号が安房を直撃する直前の夏、私の身体も人生最大の危機に見舞われた。心肺停止という信じがたい状況に陥ったのである。自分がこのような大病を患うことになるとは、全く想像していなかった。多くの方にご心配いただき、感謝を申し上げますとともに、病状についてお知らせしておきたいと思う。

人生にピリオドを打ちかねない大病の顛末は、異常ともいえる首・肩の痛みから始まった。数年前から持病のような肩こりはあったが、この1年くらいは激痛が続いていた。そこで7月に整形外科を受診したところ、とりあえず血流をよくする薬が処方された。しかし、翌朝には血便を起こしてしまった。8年前の十二指腸潰瘍をはじめ、何度か下血を経験していた私は、胃腸を空にしないと検査ができないことを知っていたので、すぐ絶食を始めた。

週末をはさんで5日後に内科を受診したところ、異常に白くなっていた私の手の平を見た医師は驚きの声をあげた。過度の絶食による貧血が重症化していると診断された。すぐに輸血と点滴がおこなわれ、腹部の出血を見るためのCT検査をすることになった。終了後に、急激な苦しみに突然見舞われた。あとで聞いた話では、造影剤が心臓を動かさず冠動脈に入った途端に心筋梗塞を起こしたらしい。心肺の緊急治療が施され、幸い一命を取り留めた。すぐに本格的な医療処置が必要とされ、医師同伴でのK総合病院救急救命センターへの救急搬送となった。7月29日のことであった。

私の場合、心臓の冠動脈3本の血管が重要な箇所において、完全に詰まった状態にあり、極めて危険な動脈硬化が起きていると診断された。腹部には出血があるので、血流を良くする薬は使えない。血管を拡げるカテーテル手術はできないほどの病変になっており、「バイパス手術」しかないという。詰まって狭くなった冠動脈の部分に、自分の身体から別の血管を取り出して移植し、新しい血液の流れをつくるのだという説明を家族とともに受け、手術の同意書を提出した。K総合病院心臓血管外科には、冠動脈バイパス手術に高名な医師がいる

と聞いていたが、その医師が主治医となった。術前オリエンテーションを受けるとともに、2週間をかけて貧血状態を治し、体力回復を図り、各種検査をおこなって手術にそなえた。

そして8月15日、胸部を約20cm切開し、右大腿部と胸部から4本の血管を移植する手術に7時間かかった。無事に成功してICU（集中治療室）に移されたものの、翌日から専門の理学療法士が付き、医療機器に繋がりがながらのリハビリが始まった。毎日少しずつ機器が外され、歩行距離が長くなり、リハビリプログラムが終了すると、病床を離れることができた。

8月27日に退院となり、自宅での療養生活が始まった。そして2週間が過ぎた9月9日、台風15号に襲われた。幸い我が家は被害を免れたが、停電が1週間続き、術後療養中の身体に厳しい酷暑が響いた。

後日心肺機能の低下が起こり、ふたたびK総合病院救急救命センターで診察を受けた。心臓血管の術後経過はほぼ順調ではあったが、定期的な検査が必要であった。血管が脆くなっていることもあり、重いものを持ちたり作業をしたりということは禁じられた。

さらに首・肩の痛みは、肋骨を切開したせい、全身の骨に広がり、だるさもあった。そこで改めて整形外科を受診したところ、今度は「**頸椎後縦靭帯骨化症**」と診断された。これは難病に指定されている疾患で、病状が進むと歩行困難になるという。今のところ、薬効により痛みが緩和されているが、しばらくは無理をせず、体調を整えたいと思う。

振り返れば、1989年に「かにた婦人の村」を初めて訪問し、創設者の故深津文雄牧師と出会って以来、足もとの地域から世界を見据えた教育とまちづくり活動をライフワークとしてきた。平和学習の地域教材づくりの調査活動から、戦争遺跡や里見氏城跡の文化財保存運動は30年続いた。当初は、「花と海の観光地に戦跡はイメージが悪い」とか、「稲村城跡に計画された市道建設に反対する教員」というレッテルを貼られ、ずいぶん叩かれた。私を応援してくれたのは、生徒たちや文化財を遺そうという志ある市民の皆さんであった。そして家族の理解に支えられた。

文化財保存運動の成果として、2004年に赤山

地下壕跡が一般公開され、館山市指定史跡となり、ガイド活動のまちづくり NPO を設立した。2012年には里見氏稲村城跡と岡本城跡が国指定史跡となった。ほかにも、青木繁「海の幸」記念館・小谷家住宅が館山市指定文化財、小高記念館や小原家住宅が国登録文化財など、7つの文化財指定に関わってきた。これらの取り組みは文化財保全や観光振興に寄与したと評価され、館山市観光協会常務理事をはじめ、館山市の文化財や景観計画に関わる委員の委嘱を受けるようになった。隔世の感があり、感無量である。

文化財は、先人たちの生き様を学び、我々が豊かな未来を創造するための知恵を伝えてくれる宝物である。天から私に与えられたこの病気も、多くを学ぶことができる人生の教材だと思っている。我が身と折り合いをつけながら、無理のない範囲で静かに活動を続け、学んできた地域研究や全国のネットワークを活かし、次世代に誇れるまちづくり活動を伝えていきたいと思っている。

なお、台風による安房地域の被害はどんどん拡大した。NPO の事務所も被災したため転居することになった。

また、「かにた婦人の村」の紹介で、全国のキリスト教系の災害ボランティア団体の皆さんが応援に来てくださり、NPO と年金者組合安房支部と連携して「安房フォーラム支援隊」を組織した。NPO の池田恵美子さんと河辺智美さんが事務局として中心を担い、被災して困っている組合員の方々の救援活動をすることができた。私は自宅療養中で何もできなかったが、お二人とボランティアの皆さんには、改めて感謝を申し上げたい。

(NPO 法人安房文化遺産フォーラム代表)

うなぎ三分の一

小沢 義宣

昨年の夏の始めごろ、ある新聞で「自分へのご褒美は何ですか」という題で、記事の募集があった。私は『うなぎ三分の一』という題で応募したところ、記事に採用されて、図書券が送られてきた。

2018年6月に、私の妻が重度の脳梗塞を発症し、言語を失い、右半身が不随になり、要介護5と認定され、施設での車椅子生活を余儀なくされた。

その結果、妻との2人暮らしだった私は、必然的に、自分の食事は3食とも自分でまかなわなくてはならないことになった。

かつて妻は、中学校の英語の教員をやっていた。夏休みになると、ホームステイを希望して全国から集まった中学校や高校の生徒たちを引率して、3週間から長いときは4週間もの間、私と3人の子供を残して、外国へ行ってしまおうということが10数年間は続いた。だから幸いなことに(?)、食事を作るということはあまり苦になっていない。

妻の発症後、外食やレトルトは絶対食べないで、自分で献立を考えて過ごしているが、そんな時に「自分へのご褒美は何ですか」という募集記事を見た。

「うなぎ」がご褒美だったら嬉しいだろうな! と、まず思った。自分で調理しなくていいし、久しく食べていないし何よりうまい。

丁度、妻の体調が良くて、施設の近くの池まで車椅子で行った直後だったので、思い切ってうなぎを買って食べた。ケチな性格なのか、一匹は多過ぎた。いや、半分でも多過ぎて、三分の一ぐらいが丁度良かった。

それやこれやで、そのことを書いて投書したところ、採用されたというわけである。

その後、新聞のチラシにうなぎの特売の広告があると、目が行ってしまい、つい買っては、三等分して、ラップにくるんで「何かいいことあった時」用に、冷凍している。

けれど、そうそういいことはなく、いつのまにか大分溜まってしまった。子供や孫たちが集まった時に、「うなぎ三分の一パーティー」を盛大にやろうかと思っている。妻が入ると最高なのだが。

(NPO 法人安房文化遺産フォーラム理事)



年金者組合安房支部
文集「なの花」
第45号(2020.1)に寄稿

1冊 300円
希望者はNPO事務局まで
(バックナンバーもあります)

《特集》 台風15号・19号・豪雨 「台風被害と支援体制の報告～安房フォーラム支援隊」
*NPOフォーラム会員執筆者＝愛沢伸雄、荒屋敷重子、荒屋敷孝、石井敏宏、沖山静彦、小沢義宣、苅込悦子、川上謹一、齋藤陽子、田中一男、田中房江、中村ヨシノ、初山京子、平野直比古、米津早雄